

## 談 話 室

## 語学の授業の思い出

中 井 幸比古

私が学生時代に受けた、語学（英語以外の外国語）の授業について、思い出せることをいくつか書く。

大学の語学の授業はどれもそうだったけれども、授業内容を全部消化しようとするに相当たいへんだった。高校までの英語の授業に比べれば、1時間の授業内容がとても多い。

初級の授業では、どの語学でも、最初の数回の発音の練習はだいたいすんなり行く。（ただし、奥の方の摩擦音などの練習をしすぎると喉の調子がおかしくなって困った）。その後出て来る色々な文法項目もまあ何とかなる。しかし、最大の問題は語彙で、なかなか覚えられない。前期は一応こなせるが、後期になると、既習のはずの語彙を忘れていて、またはもともと覚えていないために、辞書をひきまくらなければならず、練習問題がなかなか片づかないという悲惨な状況に追い込まれる、というケースが多かった。

2年生のときに、古典語を初めて習った。それまでに習った現代語と違う面が多く、とまどった。現代語の場合は、たいていテープやラジオ講座があり、耳から学ぶことができたけれども、当然そういったことはできない。ある古典語の「上がって下がる」

（と推定されている）音調というのを、先生がそのように発音されたことはただの一度もなかった（その先生はおおむね上昇調で発音されていた）し、帯気音と無気音の対立があっても、先生が両者を区別して発音されたことも、一度もなかった。そういうふうには文字を読んで行くのが、私には何とも気持ちが悪くてなかなか馴染めなかった（わき道にそれるけれど、発音の上手下手と語学力というのはほとんど相関ないのではないかと思っている。某旧帝国大学の比較言語学の権威の先生と、そのお弟子さんの一人は発音がめっちゃめっちゃだ、という話を読んだことがある）。そのうえ活用や格変化は面倒で、ただでさえ覚えられない単語がますます覚えられなくなった。

どうもこんな調子で、スムーズに上達した外国語は1つもなく、実用に耐えるほどになったものは、恥ずかしながら、1つも無いままに現在に至っている。これは、もちろん私の怠慢・無能のせいだけれども、やや特殊な事情もある。

言語学という専攻を選んだために、一般教育部（教養部）で取らなければならない第2外国語とは別に、専門でかなりたくさん外国語の単位を取る必要があった。そんな状況の中で、私の場合、両者を含めて中

級まで行ったのが2つ(但し今「〇〇語と〇〇語」と公表するにはあまりに恥ずかしい出来なので、名前は秘す)、初級は上の2言語を除いて5つの言語について、とにかく単位を取った。

もっとも、初級だけの外国語の一つというのは、第1回目の授業の時に、手を挙げて単位が欲しいといえば、後は出なくても単位がもらえるという結構なものであって、語学の授業が他にたくさんあってとても消化しきれそうになかったの、初めの2回だけしか私は授業に出なかった。

(その授業で得るところがあったのは、「咽頭摩擦音」が発音できるようになったということだけである。今、音声学の授業で学生に「聞かせびらす」ことができて重宝している)。それを除外すれば4つである。そんなことから、大学を卒業するまで、毎年、2か国語か、ひどい年は、3か国語の語学の授業を受けていた。

言語学という専攻の場合、実際に役に立つほど語学ができなくても、ちょっとかじっておけば、「専門教養」としてたいへん有益である(はずだ)から、一応初級くらいは色々やっておこう、というような心積もりの学生が割合多く、教える先生方もそういったことを心得てくださって、上の「拳手即単位」のような授業があったわけである。種々の外国語を学ぶことで、言語についての見方が広くなり、他の個別言語を専攻するにしても、広い視野から研究ができる、理論言語学の文献に、用例として出て来たときなどに、理解しやすい、などなど、利点が多い(はずである)。

但し、そういう授業の中で、どれか1つの言語を自分のモノにし、専門にするというのは、よほど意志が強固でないと、なか

なむずかしい。1年生から「私は〇〇語をやります」と宣言して入学しても、モノになる人は少ないらしい。ましてや、5つも6つも一応やって、その中の1つまたはいくつかをモノにするというのは、よほどの努力家かつ/または才能の持ち主でないといけないであろう。とくに専門のほうで開講されていた外国語は、一週間に一コマだけが授業が大部分であって、よほどちゃんと予習や、とくに復習をしておかないと、習ったことをほとんど次の授業までに忘れてしまう。私の場合、漠然と、一般教育の学生の頃は、何でもよいから何かの個別言語の研究をしたいと思っていたが、優柔不断で、どれもぼんやりと、受け身で授業を受けていたために、どれか1つに集中することもできず、結局日本語の研究に行ってしまったという経緯がある。

私の同級生にはなかったが、前後の学年で、大学の授業にもないし、日本にほとんど専門家がいらないような少数民族の言語を専攻する人が2、3あったが、そういった人たちはたいい自分で、ほとんど独学で勉強していたようだった。(蛇足だが、そういう人に、なぜその言語を選んだのかを尋ねることがよくあるが、どうもはっきりした答えが返ってきかなかった)。たぶん、何の勉強でも、授業内容・教授法についてあれこれ言ってみても、最終的には学習者自身の取り組み方次第ということなのだろう。

ともあれ、私については、たとえモノにならなくても、それなりに現在の研究に役立っていると、(自分では)思っているし、色々語学をかじる機会があったことは感謝している。しかし、言語と関係のない専攻の学生が、一般教育で受けている第2外国

語は、今いろいろの問題もかかえているという。私は実態をよく知らず、具体的対策も持たず、またあれこれ言うべき立場にはないと思うが、とりあえず、教員教を増やすということは緊急の課題らしい。本誌36号の、小林先生の文章で、学生と教官の比率が、一般と専門で1対5の比率になっているということも知った。これはこのまま

放置されるべきではない。さらに、本学では、総合科学課程が新設されて、負担がよりいっそう大きくなっている。(このことは、言うまでもないが、外国語学関係の先生だけではなくて、他の教室の先生方にも当てはまることである)。ますます教官の増員の必要性が高くなってきている。

## 私の教養部時代

川瀬雅也

私は、大学に入学して、最初の2年間教養部に属し一般教育を受けたわけですが、そのころを今、ふりかえれば教養部はたのしかったという印象が強くあります。と、いうのも、学部にあがると、毎日午後は実験、おまけに土曜の午後も講義があり、化学・化学の毎日でしたし、研究室に配属されれば、生活のほとんどを研究室で過ごすという具合で、理系以外の学問に触れる機会はほとんどなかったからです。そして、教養部で開設されていた講義内容にもよったのだと思います。私のいた大学は非常に自由で、悪く言えば、学生に「お前ら勝手に勉強しとけ」といった感じで、講義が進められていました。従って、当然ユニークなものも出てくるわけで、2, 3紹介させていただきます。まず、1つは人文地理学実習というのがありまして、何をやったかということ、学生と教官が一緒になって、測量器をかついで地図をつくるというもので、土木系の間人以外では、まずやらないようなことをさせてもらったわけです。歴

史では、私の選択したものはいきなり、わけのわからないイスラム文字が出てきて、それが1年続いたわけで、不思議と慣れると読めるようになるもので(今は、全く読めなくなってしまいました)本来の語学の講義よりもこちらの方がいいかなと思ったくらいです。語学で思い出しましたが、英語で、ミュージカル映画をみて、その内容、文学的要素、表現…を考えるとというのがあり、教科書だけの講義よりも頭に入ったような気がしますし、ヒアリングのほうもよくなったのではと思っています。自然科学の方では一応、教科書通りに進むのですが、途中で、最先端の話題が(今でいえば、常温核融合や高温超伝導といったところでしょうか)しばしば出てきたのを覚えています。ちょうど、私が大学に入学した年の秋に(もしかしたら2年目だったかもしれないませんが)福井謙一先生が、ノーベル化学賞をとったということで大きわぎになり、特に化学の講義では、何の基礎もない学生にまで、授賞対象になった研究の話が